

## KAGUYA

浦田純奈

v v v、v v v。突然けたたましい警報音が鳴り響いた。考えるより先に体が反応し、私は非常脱出用カプセルに滑り込む。カプセルが放出されるのを感じた次の瞬間、閃光と激しい衝撃が追いかけてきて、やがてあたりは沈黙の闇となった。

我々の宇宙船は爆発し、消滅してしまつた。宇宙空間を超高速度で飛んできた小さな星のかけらを我々は避けきれなかつた。

気がつけば脱出カプセルも重大な損傷を受け、自力で母星に帰る手段はなくなつていた。私に残された唯一の生き延びる道は、超低温睡眠。体を絶対零度の冷凍冬眠状態にするのだ。だが、もしこの装置にも不具合があれば、私に次の目覚めはない。不安で押し潰されそうになりながら、私は祈りを込めてスイッチボタンを押し込んだ。

私を乗せたカプセルは、生存可能な惑

星を目指して飛行を続けることだろう。ただ、そこがどこなのかを知る術は最早ない。カプセルが、遙か彼方にある《どこか》に辿り着くその日まで、私はしばし眠ることになる。遠のく意識の底に故郷の青空が見えた。

私の故郷は、銀河星雲の渦の中心近くにある惑星だ。星々の密集した所にあるため、異星からの訪問者も多い。互いをもたらず多くの知識と情報により、我々の文明は飛躍的な進歩を遂げた。今や光速をはるかに越える宇宙空間の移動も可能になった。しかし、不測の事態が起こる可能性はゼロではない。故郷の星に無事帰れる保証などどこにもないのだ。それでも私は未知の世界を見てみたかった。惑星探査船に乗り込むことが決まつたから、私はテレパシー能力を磨きをかけて、他人より強く速くテレパシーを送り、

受け取れるようになった。その上、抜群の音感を生かして異星の言語を習得するのも得意だし、初めて見る文字を読み解く技にも自信がある。

私にとって惑星探査ほど魅力的な仕事はどこを探したってない。

痛い。朦朧とした意識の中で、痺れるような痛みを感じた。それと同時に、激しい揺れの中にもいることも。目を開ければ、どうやらここはカプセル型宇宙船の中らしい。窓の外に青い惑星がぐんぐん迫ってくるのが見える。そうか、この揺れは大気圏を進んでいるからだ。私は帰ってきたのだ、故郷の青い惑星に。

意識が戻るにつれて、体の痛みが強く感じられる。何だろう、この痺れるような妙な痛みは。それにしても、一向に頭がはつきりしない。ふいに、私は超低温睡眠から醒めつつあるのだと気がついた。目覚めは通常、目的地から相当離れた地点から始まるはず。大気圏突入で気がつくというのは尋常ではない。もしかしたら、濃い大気との摩擦熱で、私の体の解凍が急速に進んでしまったのかもしれない。

それなら、この体の異常の説明もつくような気がする。

夢心地の中で着陸を感じ、ようやく意識がはっきりした時、あたりは暗かった。星が見える。久しぶりに見る故郷の星空だ。

どくん。心臓が大きな音をたてた。

変だ。月が一つも見えない。いつも夜空のどこかに見えていた、十六個もある月が一つも見えない。そんな馬鹿な！

鼓動が早鐘のように打ち始めた。

その時私の目がとらえた物。

それは、煌々と輝きながら上ってくる、見たこともない大きな月だった。

見慣れぬ大きな月を眺めながら私はため息をついた。ここは一体どこなのだろう。

冷静に考えれば、あの事故現場から一番近くて我々が生存できる環境をもつ惑星が、故郷の惑星であるはずがない。私たちの探査船は幾千もの恒星系の彼方、母星からはるか遠くにいたのだから。

水と酸素があり、生存可能な気温を持つ惑星はそう多くはない。更に、こんな大きな月を持つ青い惑星といえれば限られ

る。

私の願いも込めて、ここは太陽系第三惑星の地球と思いたい。地球なら、銀河の渦の中心からは、かなり外れたところにあるが、母星からの救助が期待できない所ではない。このあたりは星が少ない分、超光速航法も組み易いはず。意外に早く助けが来るかもしれない。それまで、なんとか生き延びなければ。

地球。私は必死に記憶の糸を手繰り寄せる。私の母星と比較的よく似た環境の星のほずだ。この惑星の住人は、ヒト型 $\alpha$ 。知能レベルは相当高いはずだが……。

《コーン、コーン》という音で目が覚めた。いつの間にかまた眠っていたようだ。

外はとても明るい。何か緑色の長い棒みたいなものが沢山並んでいるのが見える。緑色の棒は、きつと植物だ。葉らしいものも確認できる。何とも不思議な風景だ。

《コーン、コーン》

まただ。何の音だろう。おびたらしい数の緑の棒の隙間からこの星の住人の姿が見えた。我々よりやや大型のヒト型 $\alpha$

だ。衣服を身につけ、白い頭髮を結わえている。外見が我々と非常に似ているのが驚きだ。

《カーン、カーン》

今度はさつきよりは甲高い金属音のようだ。一体何の音だろう。見れば、彼が長い棒のようなもので、私のいるカプセルを叩いている。これっぽっちの衝撃でカプセルが壊れることはない。しばらく様子を見よう。

《カーン、カーン》

彼はまだ叩き続けている。うるさいわね。金属音で頭痛がひどくなってきた。試しにこっちからハッチを開けてびっ

くりさせてやるとするか。追っ払うには、これが一番だわ。

臭い。何？この臭気は。しまった。これは毒ガスだ。息苦しい。体が痺れてきた。

ああ、私はなんてバカなことをしてしまったのだろう。本当にどうかしていた。まだ何もわからないうちに自分からハッチを開けるなんて。全く正気の沙汰ではない。おまけにマスクも付けず、いきな

り外気を吸うなんて。

折角生きてここまで辿り着いたというの

に。こんな銀河のはずれで私は死ぬのだ。

超低温睡眠から急激に覚醒した為、判断能力が鈍っていたとしか思えない。薄

れゆく意識の中で後悔ばかりが胸を締め付けた。

何か聞こえる。ゆつたりとした心地よい、これは歌声？目を開けると、この星の住人が私を覗き込んでいる。黒い瞳の表情は穏やかで優しい。さっきの星人とは違う、やや小さめのヒト型 $\alpha$ だ。

そういえば、マスクもないのに普通に呼吸もできている。毒ガスの臭いは、未だ感じるものの、ずいぶん薄らいだようだ。それにここは、カプセルの中ではない。何かやわらかくて暖かいものに包まれている。

優しい目のヒト型 $\alpha$ は、私を見つめながら、ゆるやかな抑揚をつけて、また歌いだした。我々の子守唄に似ているな、と考えているうちにいつしか眠ってしまった。

突然強烈な喉の渴きを覚えた。

《水が欲しい》

給水装置に手を伸ばしたが、むなしく空をつかんだ。ああ、そうだ。ここは、脱出カプセルの中ではなかったのだわ。

本当の悪夢の世界は現実の方かもしれない。この見知らぬ惑星で、どうやって生きていけばよいのだろう。いや、考えるのは後にしよう。まずは水。カプセルなら当面の水と食糧はあるはずだ。まずはそれを取りに行こう。耳を澄ませば、カプセルから発する信号音は聞こえている。大丈夫。すぐ近くだ。

起き上がろうとした。が、起き上がれない。この星の重力は思いのほか強いようだ。違う、重力のせいばかりじゃない。起き上がるところか、手も足も、首さえも思うように動かせない。体が重たいより力が入らないのだ。急速な解凍のせい、それとも長く無重力空間にいたせいなのか。

見知らぬ星でただ一人。宇宙船からも離れ体も動かせないなんて。ああ、これでもうおしまいだ。

気がつけば、私は泣いていた。赤ん坊

のように声をあげて泣いていた。

ふいに風を感じたと思ったら、さっきの小さめのヒト型 $\alpha$ が現れた。

「おお、よしよし。目が覚めた？おながすいたのね。さあ、おあがり」

私をやさしく抱き上げて、匙を口に運んでくる。何か、いい匂いのする液体。思わず口を開けようとした時、訓練所の指導教官の声が甦った。

《異星の物は、不用意に口にはいけません。未知の物質が体にどんな影響を与えるかわからない。安全とわかるまで絶対口にしない》

だが、私の体は動かず、喉の乾きはもう限界だ。目の前には白い液体。

選択の余地はない。覚悟を決め、一口飲んだ。やさしい香りが口中に広がった。美味しい……。涙があふれた。

私は今、生きています。

地球に辿り着いて四年が過ぎた。

私は、あの時私を助けてくれた、ヒト型 $\alpha$ の地球人夫婦、オキナとオウナの子供として暮らしている。私達よりやや大

型の彼らから見れば、私は地球人の子供位の大きさなのだ。

オキナは竹取の翁と呼ばれている。竹というのは、私が地球で初めて目にしたあの緑のひよる長い棒みたいな植物だ。

あの日もオキナは、竹を取りに来ていて私を見つけたそうだ。私が聞いたコーンコーンという音は、オキナが竹を切る音だった。オキナが、光る竹を切ったら、中に女の子がいたと皆に言うのを聞き、ちよつと笑ってしまった。

光る竹とは、メタリックな光を放つカプセル型宇宙船のことらしい。私からハッチを開けたことには全く気付いていない。宇宙船が、あれしきの道具で切れる訳ないのにね。あの時は自分でハッチを開けたことを心底後悔したけれど、開けたおかげで助けられ、こうして生きています。私はなんて幸運なのだろう。

この人達は空のはるか高い所に天という所があり、そこには神様が住んでいて、一所懸命お願いをすれば、願いが叶うと信じている。子供が欲しかったオキナとオウナは、私を天からの授かりもの

だと信じ、それは大切に養育してくれた。更にオキナ達は、天から素晴らしい贈り物を受け取った。

それは、金。

我々にとつて金は、身近で、ありきたりの金属だが、この惑星の人達にとつて金は特別のものらしい。私をカプセルから引つ張り出したオキナは宇宙船の中に金を発見して大喜びし、それを天が私の養育費として授けたものだと思つて持ち帰った。地球では多くの金があれば楽に暮らせるらしい。宇宙船にあった沢山の金のおかげで、オキナ達は大層豊かになり、私も何不自由なく暮らすことができたのである。

助け出された当初、私は超低温睡眠から目覚め切つていなくて、まるで赤ん坊のように眠つてばかりいたし、思うように体も動かせなかった。やがて地球の重力に慣れ、体力が回復するにつれて、いざり、やがて歩けるようになった。地球の言葉が耳になじんで話が理解できるようになり、言葉も話せるようになった。

地球人の赤ん坊の成長にしては、あま

りにも速いのだが、オキナとオウナは、私が不思議な生まれゆえ驚くべき速さで成長したと考え、全ての不思議を合点してしまった。

この夫婦が私の名前を考えているのを知つた時、得意のテレパシーで、名前はKAGUYAだと教えてやった。だが、彼らには本来の私の名前は発音できなくて、カグヤと呼ばれるようになった。カグヤか。悪くないわ。

この大気の臭いにもすっかり慣れた。あの気絶するほどの臭気は、オキナが切つた竹の切断面から発するものだった。あらゆる臭いというものから遠ざかつて宇宙の旅を続けていた私にとつて、あれは毒ガスかと思うほど強烈で刺激的だった。だが今は、不思議だが心地よいとさえ思う。

オキナ達の家の裏山は竹林で、葉がすれ合うと香りが立ち、いつもこの匂いに包まれている。いつの間にか私もその匂いに慣れてしまったようだ。

地球人の文明はまだ未開の部類だ。彼らは、地球が球体であることも知らな

いし、月はこの世で一つだけと信じ疑いさえしない。

だが、身近なものを使いこなす能力と工夫は素晴らしい。例えば竹。住居の骨組み、家具、道具、食器、楽器も竹。竹を削り、組み、細く割いて編み、用途に応じて自由自在。さらに若い芽は食糧にも。その応用範囲の広さは感嘆に値する。

あの時初めて口にしたこの星の食べ物はオモユというものだった。オウナは料理が上手で何を作ってもとても美味い。

飲み水が、また格別に美味しい。この人たちは、裏山の岩の隙間から流れ出てくる天然水を飲んでいる。私も勧められるまま、おそろおそろの口にしたが、素晴らしい美味いのにびっくりした。創水装置で作る不純物を一切含まない純水ほど安全で美味しい水はないと信じてきたが、あれは間違いだ。異星の天然の水を飲む必要に迫られなければ、私も一生気づくことはなかっただろう。

この地球で生きていく為、私は地球人と同じものを飲み、食べた。しかし、本音は不安でたまらなかった。それで、動けるようになった時、こっそりカプセル

に戻り私の薬を取り戻してきた。最先端科学で創った万能薬だ。これで安心。オウナの作ってくれたお守り袋にこの薬を入れて肌身離さず持つている。

幸いなことに今のところ、この薬の出番はない。

オウナは、主に裏山で食材を採ってくる。一緒に付いて行く私には、見るものが全てが不思議の世界だ。食べられる木の実、毒を持つキノコ。草むらに住む小動物。空を飛ぶ虫や鳥。水の中に住む魚。

日々新しい発見にわくわくする毎日だ。中でも感心したのは野草のあく抜きだ。そのままでは食べられないものが、灰を使ったアルカリ処理で食用となる。これは我々の科学に照らしても理にかなっており、その知恵には驚くばかりだ。

ただ一つ心底恐ろしい発見があった。それは、地球人が好んで飲む酒というもの。あれは間違いなくアルコールだ。あらゆる致死性の毒を平気で飲むなんて全く地球人は恐ろしい。どうやらこの星の微生物が、いとも簡単にアルコールを作ってしまうようだ。恐ろしいことこの

上ない。決して口にしないよう気を付けなければ。

私がこの生活にも慣れたころ、オキナは立派な屋敷を建てた。それから彼は、私の為に教育係と世話係をつけることにした。

だが、やって来た者の多くは、私を好奇や恐れで見た。私は彼らに、見たものを忘れるよう強力な暗示をかけて追い返してやった。そんな視線で見られるのは御免だわ。

確かに私の髪は月の光のような金色で、瞳は青竹のような緑色だ。見たところ、地球人は黒い瞳と黒髪または白髪ばかりのようだ。私には些細な違いと気にも留めないことが、彼らには思いの外、奇異に感じるらしい。

やつと決まった教育係は、ニョウボウという女性。私を見て、大変驚いた様子だったが、光る竹から生まれたと聞いて、あつけないほど簡単に納得してしまった。どうやら私のことを、天が遣わした貴い方だと、勝手に思い込んでしまったようだ。彼女は、ミヤコというところで、ヒ

メミヤサマという人の家庭教師をしていたそうで、それがたいそう自慢らしい。そして彼女は、素晴らしく有能な先生だつた。

ニヨウボウがやって来て私の生活は変わった。広い屋敷の奥で、毎日勉強三昧。ほとんど家の外に出ることもなくなつた。けれど、新しい知識を得ることに夢中の私には苦にもならない。オキナとオウナは、『立派な姫君に育てて、よい婿君を探さなくてはなあ』というのが口癖となり、私の教育の為の出費を惜しまなかつた。高価な書物も欲しいと言えば与えられ、私は至福の時を過ごした。しかしこの頃の私は『ヨイムコギミ』の意味など全く解っていないのだ。ただただ、この星の知識を吸収できることが、嬉しくて楽しくてたまらなかつた。

立派な姫君への第一歩。まずは、話し方。これは、ニヨウボウの言い方をそっくり真似すればいいので、地球人の発音する言葉が耳慣れてきた私にとっては楽勝だ。

次は、読み書きだ。植物の繊維で作つた紙というものに、植物の燃えかすから作つた墨という黒い液体で文字を書く。道具は細い竹の先に動物の毛をつけた筆というものを使う。

最初は難しいと思つたが、ニヨウボウが手を添えて力の入れ方を教えてくれたので、やがてコツがわかり、見本と同じ線が書けるようになった。問題はかな文字という曲線文字だ。文字を覚えるのが得意のはずの私も、微妙な曲線の違いが区別できなくて、手こずつた。やつとマスターして、やれやれと思つたら、本当の難関はこの後だつた。

姫君は、和歌という形式で文章を書くのだそうだ。手本を参考に、こんな感じかな？と作つてみたら、ニヨウボウに叱られた。

「思つたままを言葉にするなんて、なんてハシタナイ」

ハシタナイ？この地球語はいまだによく理解できない。ニヨウボウの解説によると、単刀直入に思つたままを書いてはだめ。連想させる言葉を使い、あるいは、発音が同じで意味が違う言葉を駆使して、

遠回し？に言いたいことを伝える。それが教養あるお姫様のすることなのだとか。そんなの、デキマセーンと心の中で毒づいてみたものの、結局やるしかないわね。でも、慣れてくると、結構面白くなつてきた。ところが、自信作ができた、これ

はいい出来だわと思つても、明らかにニヨウボウは落胆の表情なのよね。あーあ、私には和歌の才能はないみたい。

そんなある日、海の向こうの国には直線の文字があつて、書物も沢山あるらしいと知つた。幸いニヨウボウは、こちらでも読み書きできるといふので、早速書物を取り寄せてもらい勉強を開始した。異国の書物は大変高価なものだそうだが、ここでも例の金が大活躍したらしいわ。

直線文字を勉強してみると、文字そのものに意味があることがわかつた。それなら絵模様として覚えればいい。この方が比較的私には理解しやすい。特技ともいえる文字解読能力をいかんなく發揮して、早々とマスターし、ニヨウボウを驚かせてやつた。

私の傍にはいつもシノがいる。シノは、

私の世話係となった少女だ。素直で聡明なのが見てとれ、私は一目で気に入った。私がニョウボウに教わっている間、最初の頃は部屋の外に控えていた。やがて、シノが私の習い事に興味を持っていることに気がついた。あなたも一緒にやらないう？と誘ったら、

「召使いでですからそれは許されません」と言う。オキナに掛けあつたが、やはりだめだと言う。世話係と一緒にお稽古して何が悪いのかしら。全く面倒なヒトたちね。

じゃあ、私の部屋の中に控えさせるわ。それならいいでしょ、と、強引に許可をもらった。後は私が教えればいいだけのこと。ニョウボウは、最初こそいい顔しなかつたけれど、シノと一緒にやるようになって、格段に楽しげな私を見て、いつの間にか見て見ぬふりをしてきている。ニョウボウ、アナタって、いいヒトね。

それからは、いつもシノと一緒に。シノのおかげで私の孤独はずいぶん救われた。シノは賢くて、何でもすぐ覚えてしまう。和歌もうまいが、楽器の演奏、特に笛はすこぶる上手で、私なんか足元にも

及ばない。

楽器の演奏をすることで、私と地球人とのもう一つの違いが明らかになった。実は地球人の小指に当たる指が、我々は親指の形になっている。いわば、親指が掌の両側にある訳だ。日ごろは長い袖の下、ほとんど誰も気がつかないだろう。しかし、楽器の演奏となると、いやでも手指が目に入ることになる。

異星人同士でそんなことなど、無いに等しい違いなのだ。しかし、オキナとオウナにとつては大問題らしく、可哀想に、と勝手に思ってくれて、楽器の件はシノが全面的に肩代わりすることになった。それからは、シノと一緒に勉強もオキナ達の公認となり、めでたしめでたしだわ。正直言って演奏が下手なのは、手の形のせいじゃない。地球人とは感性の全く異なる私にとつて、地球の音楽は何が良いのかよく解らないのよ。

それにしても、何で手の形が違うことが、可哀想なことなのか理解に苦しむわね。こちらの形の方が、断然使い勝手がいいと思うけどな。

そういう訳で、楽器はいつもシノが演

奏する。でも表向きは私が演奏していることになっているそうだ。何とも都合のいいことに、ヒメは他人に顔を見せないことになっているらしいわ。

今宵も屋敷の奥で、シノが笛を吹いている。なんだか、もの悲しい音色ね。私は夜空を見上げ、テレパシーを送る。

天の川と地球のヒトが呼ぶ、無数の星々の中のたった一つの故郷の星に向かって送り続ける。

《カグヤはここにいます》と。

ある日、私の為に作られた美しい衣装が届いた。なんと美しい布だろう。初めて見る織維だわ。これは何？絹というの？絹は、蚕という虫が作った繭の糸だそうで、つややかで美しい上に軽い。着てみれば暑い季節でも涼しいし、冬は暖かい。素晴らしい。地球人は大いに自慢すべきだわ。

ところで、これって、とても高価な物でしょ？どうしてそれを私に？聞けば、お金持ちの貴公子から求婚の話があつたらしい。それで、私を着飾らせるって訳？冗談じゃないわ、そんなお話し断つて下

さいな。

やがて、毎日沢山の男達から手紙が届くようになった。まずは曲線文字の解説ね。和歌は、作るのも大変だったけど、もらった和歌の解説はもっと大変。ニヨウボウやシノも駆り出して、もうまるでクイズ大会よ。

全くどうかしているわ。信じられない。私を見たこともない男達がどうしてこんな手紙をよこすのかしら。『光り輝いている貴女のこと忘れられない。どうか私と結婚して下さい』ですって？全く呆れてしまうわ。

この星では、会ったことも、話したこともない相手に求婚するの？こんな和歌のやりとりだけで結婚相手を選ぶのかしら？

オウナ達の言う立派な婿君というのは、どうやらお金持ちで権力を持ったヒトのことを指すようだけれど、それが何だっというの。私なら相手をちゃんと見て選ぶわ。

それにしても、どれもこれも同じような手紙ばかり。良し悪しはどこで判断するのかしら？ニヨウボウに聞くと、

「これなど、字も上手で男らしゅうございますね。紙も高級で趣味がようございますし」

と言う。どれどれと見てみたが、変な色の薄い紙に太い線がのたうっている。アンバランスだわ。こんなためよ。気に入らないわ！

手紙は、最初こそ面白半分に読んでいたが、こども同じようなのが毎日どっさり届くと、うんざりしてきた。シノに、「こんなにお返事書けないわ」と言うのと、

「姫君さまは、気に入った方だけにお返事なさればよろしいのですよ」と言う。これはいいことを聞いたと、それからはお手紙など開けもせずに放つたらかしを決め込んだ。うず高く積み上げられていく、読もしない手紙の山。心配するオウナに、

「私はどなたとも、結婚はいたしません」と言ったら、

「なんと愚かなことをおっしゃるのでしよう。立派な方とご縁を結んで老い先短い私たちを安心させて下さい」と泣きながら叱られた。

この時、いつも聞かされていた良い婿君という言葉に、私の結婚相手選びには、オキナとオウナの今後の生活もかかっているということに気がつき、愕然としたのだった。

まあ、私にしてみたら、こんな銀河のはずれの、野蛮な地球人などと結婚する気など毛頭ない。しかし、オキナやオウナに、顔を見る度に結婚相手を決めるよう迫られると困ってしまうわ。

結局、男たちの中でもとびきり条件のよい五人を選び出し、その中から結婚相手を決めることになってしまった。おお、嫌だ。彼らの名前さえ聞きたくないわ。本当に結婚する羽目にならないように、なんとか作戦を考えなくては。

そこで、条件を出した。今まで読んだ書物の中から、この星の科学や技術力では到底有り得ないものばかりを選んで、それを持って来いと言ってやった。まあ、持って来たところで、それが本物でないことを証明するのにさして苦労はしないはずよ。

課題其の壱。仏の御石の鉢。一目見て、

偽物とわかったわ。

課題其の弐。火鼠の皮衣。燃えないはずの布は、あつげなく燃えてしまった。課題其の参と其の四。ケガヤ、病気で二人がリタイア。

課題其の五。蓬莱山にある玉の枝。

差し出された玉の枝を見て、青くなった。

根が銀、茎は金、真珠の実の枝。

実によくできている。まるで本物に見える。天然に存在するはずがないことは、私には解っているし、証明することもできる。

だが、それが偽物の証明になることを、そういう方面に一切の知識を持たないこの星のヒト達はどう説明すればいいのだろう。頭を抱えたまさにその時。

細工職人達がやって来て、私に宝石の枝を作った代金を払ってほしいと言ってきたのだ。玉の枝が作り物だと皆にわかり私は胸を撫で下ろした。もちろん職人達には、どつさり褒美をとらせたわ。この星の金属細工の技術を見くびっていたことを、大いに反省した。冷や汗ものだったけれど私には幸運の女神がついているらしい。

候補者が全員だめになり、私は正直ほつ

としたが、オキナ達は、さぞがっかりしたことだろう。それなのに、姫にはもつとふさわしい方がありますよと、逆に私を気遣い慰めてくれる。私を心から愛してくれる優しい人達。いつか私が星に帰る日が来たら、どんなに悲しむかしら。私もいつの間にかこの二人が大好きになつてしまった。あんなに待つていた救助が今は来ないでほしいと思つたりするの。

《カゲヤ、応答せよ。カゲヤ、応答せよ》

不意に私の頭に飛び込んできた言葉。

これはテレパシー通信だ。聞こえる。かすかだが、確かに聞こえる。

《我々は、君の救出に向かっている。もう少しの辛抱だ。頑張りなさい》

涙があふれた。ついに迎えが来るのだ。

交信相手の名はマーズ。彼が言うには、着陸地点がもう少しずれていたら、私は今頃深い海の底だったらしい。もう少しで海ですって？ここは山里なのに？きつとまだ地形を詳しく解析出来ないほど遠い所からテレパシーを送っているのね。迎えが来るまで、もうしばらく時間がか

かりそうだわ。

そんなある日、ミカドと呼ばれているヒトからのお手紙が届いた。オキナ達は、腰を抜かさなばかりに驚き畏まっている。

ミカドとは、この国の一番エライ人だぞうだ。私の噂は、遠い都の宮殿の奥にまで届いてしまったようなのだ。エライの意味が今一つよく理解できないが、要するにボスつてことよね？オキナ達は、畏れ多いつて言うのだけれど、私にはよく解らないわ。とにかく、面倒なことにならないようにしなくては。

ようやく私にも、このヒト達の社会事情が少しはわかつてきた。ミカドからのお手紙ばかりは、無視するわけにはいかない。都に来てほしいというのを、畏れ多いという言葉を繰り返して断り続けていたら、とうとうミカド本人が私に会いに来られた。これでは、会わない訳にはいかないわね。

私はボスだということで、勝手にオキナ位の年齢のヒトだと思つていただけれど、思いの他、若い男性だった。都から馬を飛ばして来るなんて行動力がある

のね。それに知性的。ちよつと私好みだわ。でもそんなことを言っている場合じゃない。向こうから相手にしたくない、と思つてくれるいい方法はないかしら。

そこで、できるだけ難しそうな話題を選び、こんな女とは付き合いたくない、と思わせる作戦に出た。隣国の書物の話から始まり、文化論、兵法に政治論、遠慮なく言いたいことを言つたわ。ところが、いつの間にか話が盛り上がり、ミカドは、

「ああ、楽しかった」

と、上機嫌で帰つて行かれた。まさか、これつて逆効果だつたかしら。

悪い予感的中し、すぐお手紙がきて、求婚されたのは困つてしまった。それから毎日お手紙が届き『あなた以外のひととの結婚は考えられない、恋人達ともみな別れました』とある。そんなこと言われても……。

やがて、『迎えをやるから都に出てきて結婚して下さい』と矢の催促が届くようになってしまった。

確かに、私もミカドとお話していて楽しかった。彼は、何でもはつきり物を言

う、面白いヒトだ。

帰りの際のミカドの言葉が思い出される。「私の周りには、私の言うことに反論するヒトはいない。あなたのように、思うことを率直に言つてくれれば、どんなに良いだろう」

ああ、彼はそういう立場にいるのか。自分に対して遠慮なく意見を言つてくれる人が欲しいのね。

そして、もう一つ。私は意外なことを聞いた。なんと、私には屋敷の外まで光るような、オーラがあるというのだ。ミカドは、こともなげに、視えますよ、と言う。

「きつと他の者たちにも視えていますよ。実際そういう噂を聞いて、私も会つてみたくなつたのですから」

それを聞いて、あの手紙の山を思い出した。確か、『光り輝く貴女が忘れられない』とか書いてあつたわ。会つてもいない私になんで？と呆れたものだが、私の出す光が見えていたということならば、辻褄が合う。それと、ニョウボウが私を一目見て、貴い方だと思つてしまったのも納得がいく。もしかしたら、光る竹と

いうのも金属の光ではなく、本当は私の出す光だったのかしら。驚いた！地球人ってオーラが視えるなんていう、すごい能力を持つていたのね。

気がつけば、ミカドのことを考えている私。彼の博識に感心したし、真摯なものの考え方や態度にも好感が持てた。いつまでも話をしていきたい相手だわ。もし私が地球人だつたら？結婚を承諾したかもしれないわね。

オキナとオウナは、これ以上の縁談など望むべくもないと、否応なく話を進めようとする。一方、私も不用意にこの話を断つては養父母の立場がないことを理解していた。何といつても私をここまで養育してくれたのだ。この二人に迷惑はかけられない。どうしたらよいのだろう。とにかく、ミカドと結婚はできない。私は思い切つて正直に、でも地球人に理解しやすいよう少々脚色を加えて、ミカドにこう手紙を書いた。

『私は異星人で（この世界の者ではなく）宇宙船の故障により（障りがあつて）この地にやってきたが、やがて故郷（月）に

帰る定めであるので結婚はできません』

月からの使者に連れて行かれるのなら、ミカドの面目もオキナ達の立場も守れるわ。

すると、「月からの迎えなど私が絶対阻止してみせるから、ご安心を。貴女のこととは、私が全力でお守りします」という、なんとも頼もしいお返事が届いたのだった。仕方ない、なるようになるわ。救出船はもうそこまで来ているのだから。

私に月の世界から迎えが来る、と聞いて、オキナとオウナは驚き、悲しんだ。

「あなたは、私たちの娘です。絶対誰にも渡さない」

屋敷の奥に何重にも壁を巡らせた部屋を作りそこに籠ろうと言う。多くの護衛も雇い入れた。

「私達が必ず守るから、安心おし。ミカドも助けて下さるのだから、心配いらないうよ」

心から私を大切に思ってくれているのがわかるから、よけいに切ない。大好きなオキナやオウナの傍にずっといたい気持ちと、故郷の星に帰りたい気持ちの間で私の心は揺れ続けた。

救出船が地球に近づくに従い、テレパシー交信は感度が鮮明になり、返事もすぐ届くようになってきた。彼らの情報によると、はるか昔に、地球を探索した記録があるが、その地点はいずれもここからずいぶん離れた所らしい。

私のいるあたりのデータは全くないそう。竹、絹、文字、そして大きな月。私からの情報にマーズは興奮し、次から次へと地球のことを聞きたがる。

テレパシー通信は、私が集中できる夜間に行うことが多い。私の周りのヒト達には、その様子が月を見ながら物思いにふけているように見えるらしい。

地球のこの大きな月を、今の私は心から美しいと思えるようになった。この月を見て打ちひしがれた日が夢のようだ。

私が月から来たことにしてあると言ったら、マーズは面白がつて救出日を満月の夜に設定した。それもその日はスーパームーン、つまり楕円軌道の月が地球に最接近する日に当たるとか。ただでさえ大きい地球の満月が、さらに、大きく明るくなるはずだ。カグヤヒメが月に

帰っていく物語の最高の舞台と言う訳ね。

だけど心配だわ。私を行かせまいとオキナ達は抵抗するだろう。私を助けてくれた親切な人達。私を愛してくれた大好きな人達。

《この星の人達を絶対に傷つけないで》とマーズに頼んだら、それなら麻酔光線を使おうと言う。それは名案。体がしばらく動かなくなるだけだから、誰も傷つけないで済むわ。

シノは今や私のかけがえない友達だ。聡明な彼女には、包み隠さず全てを話した。

私は、月よりもっと遠い星から来たこと。私は声を出さなくても、言葉を伝えることができる。我々は、空を移動することができ、大きな岩を一瞬で粉々にすることもできる。私を迎えに来る仲間達は、ミカドの武力でも、とてもかなう相手ではなく、私は彼らと帰らなければならぬ。

私の話を聞きながら、シノは、驚くというより、やっと謎が解けた、というよきな表情をした。きつと私について不思議

議に思うことが多かったのでしょうかね。けれど、別れが避けられないことを知ったシノは私に取り纏り大粒の涙を流して泣いた。ごめんね、シノ。だけど、オキナとオウナのことを頼めるのはあなたしかいない。どうか後のことお願いね。

ついに満月の日がやってきた。

ミカドは、ありつたけの兵を護衛によし屋敷の周りは兵士で埋め尽くされた。でも、あんな剣や弓矢でどうやって宇宙船相手に戦うというのだろう。私の仲間には、あなた達の想像を超えた相手なのよ。私を決して離すまいと固く抱き締めてくれたオキナとオウナ。そのぬくもりに包まれて、幸せだった日々を思う。このままここに留まろうか？そういう選択肢もあるわ。どうするカゲヤ？

東の空に美しい満月が昇り始めた。それも、今宵はスーパームーン。その大きさ、明るさは、たとえようもなく美しい。

いつもの月と違う気配に気がついて、屋敷の周囲を幾重にも囲んだ兵士たちの間に、動揺と緊張が走る。やがて、突然

真昼のように空が明るくなり、宇宙船が現れた。あまりの眩さに皆啞然として空を見上げている。ややあつて、どこからか《矢を放て》という声が上ががり、弾かれたように兵士達が矢をつがえた瞬間。宇宙船から目も眩む光が発射され地上の人々は、そのまま動けなくなってしまうた。

宇宙船から地上に向けて光のアーチがかかった。光の中を、メタリックに輝く宇宙服に身を包んだ仲間達が次々と姿を現した。宇宙船からは、美しい七色の光線が照射され、《月からの使者》である彼らをキラキラ輝かせている。幾重にも巡らせたはずの部屋の戸はいつの間にか開け放たれ、彼らは難なく私の所へやって来た。

《カゲヤ、迎えに来たよ。無事でよかった》  
気がつけば、私は、しっかりと抱かれていたはずのオキナ達の腕の中から、ずりりと抜け出してしまっている。なつかしい母星の言葉を聞いた時、私の迷いは消えた。帰ろう、故郷に。

次々に『月からの使者』が降り立ち、

彼らと言葉を交わす毎に、私は地球のカゲヤから、本来の私、KAGUYAへ変わっていく自分を感じていた。

仲間達は物珍しげに周りを見回していたが、やがて驚異的なスピードで記録をとり始めた。そう、私達には、いちいち文字や絵を書かなくても画像やデータを残す方法があるのよ。

わあ、これが絹だね。竹籠ってこれが？これが筆と墨なの？書物ってこれ？この模様みたいなのが文字なの？これは何？これは何とマーズ達からは質問の嵐だ。やがて彼らの質問が途絶えた時、カゲヤヒメの帰りの支度は整った。

ついに別れの時が来た。

「オキナ、オウナ、大変お世話になりました。今まで育てて頂き、有難うございました。御恩は決して忘れません。お名残惜しゅうございますがこれでお別れでございます」

私は姫君として教え込まれた作法通りに手つき、最後の別れの挨拶をした。涙があふれ、袖を濡らしていく。

仲間達に導かれ、宇宙船へと続く光の道を進みながら、思わず振り返ると、オキナとオウナ、ニヨウボウ、シノが泣いているのが見えた。

《ニヨウボウ、色々教えてくれて有難う》

《シノ、後のこと、頼んだわよ》

《ありがとう。さようなら。お元気で》

心を込めて、愛するヒト達それぞれにテレパシーで別れを告げる。

また涙があふれたが、私はもう、振り返りはしなかった。さようなら。私は自分の星に帰ります。

宇宙船が夜空の彼方に去り、月がいつもの光を取り戻した時、目標を失った沢山の矢がむなしく空を舞った。

思った通りだわ。折角こんな遠い所まで来て、そのまま帰る訳ないわよね。地球の調査、太陽系の調査、我々はかなり長い間地球の近くに留まった。そして私自身は《異星の》物質を宇宙船に持ち込まないため、相当の期間を隔離室で過ごした。

実は、こうなることを予想して、シノ

にテレパシーの使い方を教えておいたの。全てを知ったシノは、喜んで協力してくれた。シノの声が遠くまで届くようにと、私はカプセルから探し出した材料で増幅装置を急ごしらえた。それで、シノとは、その後もかなりの期間、通信できたという訳。

私が去った後のこともいろいろ聞いたわ。

オキナやオウナには、悲しい思いをさせてしまった。

ミカドには、置き土産にと、私の万能薬を不老不死の薬だと差し上げた。でもミカドは高い山のでっぺんでそれを燃やしてしまわれたのですって。それでよかったのだわ。だって異星の物は決して口にしてはいけないのですもの。

シノはその後ミカドに召されてお傍近くで仕えるようになった。そして、後に竹取物語を書いてベストセラー作家になったのだとか。

やがて、調査を終えた宇宙船は地球から遠く離れ、ついに、シノの声も届かなくなった。

長い旅を終え、今私は母なる星に帰っている。満天の星空には大小さまざまな『月』が賑やかに輝いているが、私にはなんだか物足りない。地球の満月の美しさは宇宙一ね。

私は地球での日々を決して忘れはしないでしょう。